HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	俳優たちの映画 : ジョン・カサヴェテス作品における俳優演技の理論と実践 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	堅田, 諒
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15978号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92104
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Ryo_Katata_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：堅田　諒

	主査　教　授	阿部　嘉昭
審査委員	副査　教　授	応　雄
	副査　教　授	浅沼　敬子

学位論文題名

俳優たちの映画――ジョン・カサヴェテス作品における俳優演技の理論と実践

・当該研究分野における本論文の研究成果

レイ・カーニーらが領導したこれまでのカサヴェテス研究に、本論文は一石を投じた。カーニーらが強調した「即興演出」にまつわるカサヴェテス神話に幻惑されることなく俳優の演技論という新奇な切り口を提示し、撮影稿に至るまでのシナリオのさまざまなヴァリアントなど入手困難な資料を博捜したほか、スタッフ、キャストの証言・述懐をも多様に英語文献を交えて盛り込み、緻密な計画に裏打ちされた各撮影現場を立体的かつヴィヴィッドに捉える試みに成功している。結果、日本はおろか西洋の映画研究にも現状存在しない、カサヴェテスの大部で斬新なモノグラフが実現された。論文題目の副題にあるように本論の新奇性は俳優演技というテーマに理論的かつ実証的に取り組んだ点にあるが、各作品の解析は作品のしるす空間と時間の緻密な構造分析も伴っている。これらにより、カサヴェテス映画における俳優の身体描写の特異性が明確にされた点も本論文の功績の一つといえる。

とりわけ、ジョン・マーレイとジーナ・ローランズ間、リン・カーリンとシーモア・カッセル間、これらふたつの恋情成立を並行的に描く『フェイシズ』では、ラストで、傷ついたジョン・マーレイとリン・カーレイの夫婦が家屋の階段を出入りする様子がロングショットで捉えられるが、そこで意味に還元できない空間と時間の混濁が生じることが緻密に考察される。またベン・ギャザラ、ピーター・フォーク、ジョン・カサヴェテスが俳優として結集し、女たちとのそれぞれの乱痴気騒ぎが描かれた問題作『ハズバンズ』では、一旦レールに乗った前半・後半の反復構造が、やがて数値「３→２→１」の減算構造へと変じてゆく様相が立証され、乱調と捉えられることの多い本作での緻密

な配慮も明るみに出された。映画監督・濱口竜介の論じた「カサヴェテス的瞬間」の、後半での不発を果敢に指摘、そのことで作品の全体構造がより緻密に把握されてもいる。さらにはピーター・フォークの妻役ジーナ・ローランズの陥る狂気を描く『こわれゆく女』では、ローランズの入院半年後の帰宅で狂気の反復が起こりそうになりながら、それが奇跡的に回避されてしまう作品の映画性が、ローランズを取り巻くフォークと子供たちの身体性の検討とともに称賛される。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は本論文がさまざまな点で充実した研究成果を挙げていると評価する。本論が、即興性を強調する従来のカサヴェテス論に対して、俳優の演技という切り口でカサヴェテス映画の新たな解釈の方向性を示したことは特筆される。ただし審査委員会では、その成果を確認したうえで、カサヴェテスのフィルモグラフィ上の撮影の変化、ジャンル映画に接近する上での俳優演技の変化などがより綿密に分析されるべきではないかという指摘もなされた。たとえば第三部では『チャイニーズ・ブッキーを殺した男』でフィルム・ノワール、『オープニング・ナイト』でバックステージものなど、既存の映画ジャンルに接近しつつ批評的な距離をも置いたカサヴェテス監督作品の晩期が論じられ、論文の全体構成に変化をしるしているが、ある意味ではカサヴェテス作品のなかで最も人口に膾炙した中年女性と子供の「バディ映画」「逃走もの」であるコロンビア映画が配給した『グロリア』が章立てされていないのが惜しまれる。本作では『オープニング・ナイト』で全身を使った目覚ましい泥酔演技を披露したカサヴェテス夫人ジーナ・ローランズの、アクションを契機にした別の全身演技が分析できるからである。

カサヴェテスの撮影現場が、本番撮影とリハーサル撮影、それぞれの長回しの縫合からカット割に傾斜していったこと、『オープニング・ナイト』がバックステージもののみならずサイコ・ホラーというジャンル的側面をもち、そこで別の脱分節的なカメラワークが採用されていること、序破急とも呼ぶべき『フェイシズ』、賑やかさと孤独の波動とも呼ぶべき『ラヴ・ストリームス』など、作品の時間性に着目した本論に当然あってよかった時間性の分析が欠落している点も指摘された。

審査委員会では、これらが、「俳優演技の理論」へと論旨を純化するために起こった枝葉の些細な欠落であることを、口頭試問を経て確認した。学位申請者は、指摘された部分を補填し、論文の全体性を強化すると約束した。申請者にはそれが可能な真摯さ、画面分析力、論理性もある。以上を踏まえ、本審査委員会は全員一致で学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。